

いと思う。

チベットの名を探索するのに最も利用價值のあるのは案内記即ちカルチャグdkar chagの類であらう。遺跡巡禮者の多いチベットではそれらの人々のために案内記が種々作られている。第五代ダライの作つた「ラサ案内記」はグリーンウェデル Grünwedel の翻譯によつてよく知られてゐる (Die Tempel von Lhasa, Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie, phil.-hist. Kl., 1919, n. 4)°。又 Charles Bell が紹介してゐるニャンチニギン Nanchos phyun-a (ベル著 橋本光實譯「西藏の喇嘛教」三七八頁)°、一般的に興味ある歴史を多く含んでをらず、寧ろ此のニャン溪谷への案内書であつて、如何にして各種の僧院が出来たかの過程、及び其處に住んでゐた聖人の光景、奇蹟、傳説が書かれてゐる。と言われるところを見ると、その名に似ず實はカルチャグの類のものである。この種のものがチベットに他にもあることはベルが實例を擧げて確言して疑ないが (前掲書三七九頁)°、その有用性については必ずしも從來明確には示されていなかった。

— 175 —

Tibetan Kings, Rome, 1950, p. 1, 佐藤長「古代チベット史研究」上、京都、一九五八、二三一頁。カルチャグの持つ有用性はこの例で明かになると思うが、トウッチ氏がそのとき出版を豫告した (ibid. p. 75, fn. 2) キェンツェの案内書の全譯と研究が即ちここに紹介せんとする文獻なのである。

本書の構成は編者の序言六頁、導言四頁、テキスト三三頁、譯文 (三七—七六頁) 及び註釋 (七七—一九九頁) から成る。キェンツェ (一八二〇—一八九二) は本來は *Hjam dbyans mkhyen brtsehi dbaṅ po kun dgah bstan paḥi rgyal mshan* と云ふ密い名であるが、我々はこれをキェンツェと略稱しているわけである。彼は中央並に西部チベットの聖跡を數多く訪ね、この書を書いたのであるが、譯者のフェラリ女史はトウッチ氏の高弟で、ローマ大學の講師であつた。彼女は將來を囑目されたインド學、チベット學の少壯の學究であつたが、一九五四年に長い闘病の後逝去したためこの研究—主として註釋の部—は不完全な形のままで残された。註釋の主たる目標は地名を現在の地圖に比定してゆくことと、その遺跡、遺物に關係ある歴史的注釋であるが、この仕事を引繼いで完成したのが同じローマ大學のベテック氏 *Luciano Petech* である。ベテック氏がフェラリ女史の原稿を整理編輯するに當つて決定した方針は最初の序言に詳しく述べられているが、女史の功績をできるだけ残すように配慮し、自らの注は括弧内に入れて責任を明かにする等、その學的良好の清潔さには頭の下る思いがする。更に氏は會て第二次大戰中チベットに在つて公務の傍ら研究に従事したりチャードソン氏 *Hugh E. Richardson* に應援を求め、不明の遺跡、遺

物はリ氏によつて一層明かにされている。而して氏等によつても尚不明であつたところは、やはり大戰中チベットに潛入していた技師 *アウフシュナイター氏 Peter Aufschneider* が註釋を施し、その現狀を明瞭に説明している。先ず歴史的にも地理的にも完璧な内容で本書の註釋は構成されているわけで、卷末に付された三枚の地圖—その地名はすべてチベット本來の綴で書かれている—とともにその有用性は絶大なものである。

例えば古代史に關係する重要地名 *ラタメルリンサン Brag dmar mgin bzah* (四四頁)、『タルグ *Khra ḥbrug* (四九頁)』、『モンタ *ンブン Bsan than* (Jha ri) sgo bshi (五二頁)』等は明確にその位置を比定されている。又プトンに見えるソンツェン時代の寺院 *ガツェル Ska tshal* (一〇九頁註一二)、『ロータグコムデイン (一三—一頁註三七三)』等も分りにくい地名であるが、本書ではその位置は明かで疑問の餘地がない。プトンといえはやはりソンツェン時代の寺院としてもモンユルのブマンバロギェルチュ *Mon yul bun than spa gro skyer chu* があるが、本書がキチラカン *Skyi chu lha khan* をこれと同一視しなかつたのは (四〇頁註四〇〇) 正しいと思う。ベテック氏のいうごとく *バロギェルチュ* は西プータンの *Parochu* と同一のものと見なすべきである。遺憾ながらこの寺院の實在を確めることは現在できない。中尾氏は *バロゾンの奥* が大きな寺院になつてゐることを傳えており、それには寫眞まで副えてあるが (中尾佐助「祕境プータン」東京、昭和三四年、八〇頁)、プトンのそれとは關係なさそうである。

中世史では赤帽 *カルマ* の本山 *ヤンパチェン Yans pa can* 黒帽

カルマパのツルプツ Mstshur phu 等無数の寺院名が明かにされているが、タグツァン Stag tshañ の位置が確定化されたのは驚くべきことである。明廷によつて封ぜられたチベットの八大法王は不明のものが多く、その一つに輔教王があり、思達藏の僧であるといわれている。我々はこの地名を色々に探査し、未だにそれを発見し得ないでいたのであるがそれは道理であつた。フェリリ女史はトウツチ氏の指摘により、これを明かにタグツァンの系統であり、一時は盛であつたが今は滅んだと見なされるカ・ギェパの一分派であると註しているからである（一二〇頁註一九二）。有名なリコンバ・Hbrt khut pa の大寺院が新舊二カ所あること等も本書によつてはじめて具體的に知られることであろう（一一一頁註一一五）。このようなことが分明するのもキェンツェの案内記に遺跡としての記述が充分に残されているからに外ならない。

案内記には地名のみでなく人名も數多く含まれている。殆どが名を成した高僧等のそれであるが、彼等についての傳記的註釋も簡にして要を得ており、參考文獻も丹念に挙げられている。尚卷末にはリチャードソン氏が提供した各寺院や王陵等の寫眞が五三枚掲げられているが、何れも名のみ聞いて實物を知り得なかつた我々にはその一一が重要な參考となるものである。

とにかく本書はその内容からして、今後チベット史、チベット佛教史を研究するものにとつては必要不可欠の文獻となるであろう。テキスト處理の方法についても前述のごとく方針が明確であり、後學の士の學ぶべき點が甚だ多い。唯本書はテキストの性質上、中央及び西チベットの東半にその範圍が限られている。我々は更に東チ

ベット及び東北チベット方面についてこのような優れた研究が與えられたならばと希望せざるを得ない。些か望蜀の言ではあるが最後に一筆附してこの無難な紹介を終りたい。

〔佐藤 長〕

東洋史研究叢刊之七

中國隨筆雜著索引 佐伯 富編

本文 千百七頁 筆劃索引 三十四頁
定價 二千五百圓 國內送料本會負擔

本索引は先に刊行した中國隨筆索引の姉妹篇である。皇宋事實類苑・鶴林玉露・丹鉛總錄・古今事物考・野獲編・十駕齋養新錄・池北偶談・清稗類鈔など約五十種の書物から、目次だけでなく、本文中の重要な項目をも採集して、カード數八萬に達したものを、五十音順に排列したものである。東洋史專攻者、中國學研究者は勿論、廣く史學文學中國の自然科學研究者にも必須の書であろう。

右書御希望の方は當會まで御申込み下さい。

東洋史研究會
振替京都三七二八番